

特集●荒川流域を知る (1)

【かつて東京は水の都だった】

江戸時代、東京は“水の都”だった。たび重なる水の被害を受けたが人の手による技術で多岐にわたって利用もした。人は身近に水があり、水の怖さも魅力も知っていたから水を大切に、防備もした。

近代以降東京は、科学技術を手にして巨大な“陸の都”に成長した。規模と能力を拡大させた技術力が水を遠ざけ安全で便利な生活を提供してくれた。しかし人は、ありのままの水を知らないまま厳しさの増す暑さの中で、無防備に暮らしている。

水を見に行く (1)

【ローマの水・その文明に文化は生きているか】

二千年以上も前からエンジンこそもたなかったが近代道路、近代水道の概念をもって都市基盤を整備してきた西欧。

一方、近代化の中にあっても依然自然と共存していると聞くアジア諸都市。

海外の都市も水問題を抱えているのだろうか。しかし、それ以前に私たちは海外の水事情をよく知らないことに気づく。そこで都市用水の水源や消費量、水道料金としてみたことから海外の水探訪を始めることにした。

第一回はもちろん「ローマ化＝文明化」として西欧諸国に「インフラ整備」を普及させたローマから。

【D 田んぼ日誌から】

今年は稲（キヌヒカリ）の生育がよくない。田植え後しばらくは元気だったのに、一月たつてまずまずのできのところもあるが、全体に草丈が不揃いで、葉幅が細く力強さが無い。ひどいところでは、水が深いところを中心にだんだんひよろひよろしだして葉の色も薄くなってきた。

隣の田んぼで一人耕作する鈴木さんのおじいさんからも、「今年はよくないね」言われてしまった。去年は種籾からの米づくりを初めて体験したにもかかわらず、単収（一反あたり）七俵半（450kg）もあって、今年は八俵（480kg）を目指そうとみんな、意気込んでいたのに。

私たちは、去年は八名、今年は新たに二名と大学生六名が加わり十六名で、無（減）農薬、有機肥料栽培の米づくりに挑戦している。

私たちが「D 田んぼ」と呼ぶ二反二畝（22a）の田んぼは、「さいたま新都心」と「埼玉スタジアム 2002」の間に広がる首都圏 20～30km の「見沼田んぼ」の一角にあり、見沼田んぼの保全を目的に県から借りている。